

パリからの、研究動向報告

市川 文彦 教授

2014年4月から一年間にわたり、EHESS（フランス共和国・国立社会科学高等研究院）の歴史研究センター（在パリ）を拠点に、Visiting Fellowとして近代社会経済史研究を展開中である。この与えられた機会での、我が研究テーマの一つは内陸水運を中心とする近代フランス交通システム整備過程の実証研究。受入教官パトリック・フリーダンソン研究部長と意見交換し、所内セミナーへ参加しつつ、水都パリが蓄積してきた膨大な河川・運河舟運史料を検索するために、パリ市役所内のパリ市行政図書館へ日参してきた（写真①）。その所蔵する

19世紀フランス舟運史料、関連統計書上の諸データ収集から解明したのは、近代鉄道網拡張期においても、輸送経路、輸送費の優位性により既存のフランス内陸水運ネットワークが衰退せずに着実な成長を続けた状況、鉄道貨物との連絡拠点設定による水運網機能拡充化を通じた国内輸送体系革新である。近代パリ市と有力地方都市たるリヨン市への各物資供給圏の拡がり具合の、内陸水運システム上の展開を現地に実証的に検討した論文（『経済学論究』本学部設立記念号へ掲載予定）は、いわば、その中間

報告。フランス一国の近代交通体系発展を吟味するにも広く欧州、世界の流通ネットワークとの地球規模での関係性に位置付けるべき研究上の視点を、改めて再確認した。

もう一つの研究テーマは、経済・経営主体としての組織、組織間ネットワークの史的分析。科研費共同研究グループの一員として、経営学者と協同しつつ近現代の有田焼産地の発達過程を史的事例にして、有力中小企業による市場組織化が注目される近代欧州等の経験をも視野に入れ比較史的検討を進めている。

マルチ・セクター・パートナーシップ構築という視点から産地における様々なアクターの人的ネットワーク、組織間関係の整備と機能の歴史分析によって、各産地間の力関係、産地の特質形成が明らかにされつつある。今年度7月にはロツテルダム（於エラスムス大学）で開催された欧州組織

学会EGOS・年次大会の（企業家群・ネットワーク構築・クラスター）セッションにて、報告者及び予定討論者として討議に参加した（写真②）。目下パリにて次のアテネ大会2015等へ向け、産地・有田、比較軸としての近代フランス等の窯業諸産地を具体的な検討事例として、組織体への様々な歴史分析法の有効性、その解析結果の含意をも問うていく共同研究報告の準備に取り掛かっていると。



〈写真①〉



〈写真②〉